The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	古代中国犬文化の研究 : 食用と祭祀を中心に
Author(s)	桂, 小蘭
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44454
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【4】

氏　　名	桂（けい）　小蘭（しょうらん）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学位記番号	第　17993　号
学位授与年月日	平成15年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	**古代中国犬文化の研究－食用と祭祀を中心に－（論文要旨）**
論文審査委員	（主査） 教　授　仙葉　豊 （副査） 教　授　深澤　一幸　　国立民族学博物館助教授　佐々木史郎

論文内容の要旨

本論は古代中国の犬文化を食用と祭祀儀礼の両面から論じたものである。古代中国では犬は、牛、豚、羊などの家畜と同様に本来、食用および祭祀のために飼育されたことが多く、狩猟や愛玩のために飼育されたものではない。これは犬肉を・食べない国と大きく異なるところである。そのため、犬肉の食習慣の盛んな上古時代の中国で、犬（狗）、は走犬（猟犬）または吠犬（番犬）と特に明記しないかぎり、たいてい食用犬を意味するものであった。古典に「食犬」（食用犬）という言葉が見つからないのもこのためだったのである。これは豚や魚などをわざわざ食用豚、食用魚とはいわないのと同じことである。また、犬肉の料理法については、その多くは犬肉だけの特別な作り方ではなく、牛、羊そして豚肉にもみられる作り方であった。これらの料理法のなかで、たとえば、内臓、肩、皮付きの肉を好む食習慣は現代中国人にも受け継がれているのである。このように上古時代では、犬肉は一部の現代人が考えている異常な食肉ではなく、羊や豚の肉と同じ感覚で食用にされた食肉の一つであった。

古代中国の食肉の中で、犬肉のランクはかなり上で好まれた食肉であった。周礼では、一般の祭祀や日常の食事における犬肉の食用は貴族階級の「大夫」以上の身分のものであった。ただし、重要な祭祀なら大夫より地位の低い「士」も使用できると定められていた。それは一般の庶民が食べる肉ではなかった。漢代に入ってからは、食肉難や厳しい身分制度がやや緩和され、肉を食べることのできる人が増えたが、依然として庶民の常食するものではなかった。『塩鉄論』散不足篇に「今富者祈名岳、望山川、椎牛擊鼓、戯倡儛像、中者南居当路、水上雲台、屠羊殺狗、鼓瑟吹笙、貧者鶏豕五芳、衛保散腊、傾蓋社場」とあるように、犬肉を用いて祭祀を行ったのは中間階級の人たちであって、貧しい人が使ったのは鶏や豚の肉であった。このように漢代でも、豚や鶏の肉よりも犬肉の方が上等だとされていたのである。このように古代中国では犬肉はけっして飢饉をしのぐための食料ではなかったことは明らかである。

古代中国における犬肉の食用は一種の食文化である。それを最初から根底で支え、さらに促したのは、古代中国の儀礼制度、陰陽五行思想、そして古代中国人の鬼神信仰であった。陰陽五行思想が犬肉の食用を支える理論根拠であったというならば、鬼神信仰はその思想の源であり、礼はその思想と理論を実践する場であったといえるのではないか。この三者は互いに影響し、密接な関係にあった。

まず礼と犬肉の食用については、周礼における犬肉の食用の意義はおよそ三つにまとめられた。

第一、養老礼に犬肉が用いられたのは、犬肉は体を温め、陽を補う作用があるため、養老・養生に適しているとされていたからである。つまり敬老のためであった。敬老精神は儒家の「孝」の理念の重要な部分を占めている。祖先祭祀も「孝」の思想の現れである。諸礼のなかで儒家が第一に祭礼を挙げたのもそのためである。

第二、「忠」も礼の重要な内容の一つであった。儒家の君臣観からいうと、臣は君に忠を尽くし、君を守る義務がある。このため、郷飲酒礼における犬肉の食用は、君への忠誠心を象徴する意味合いがあった。

第三、「礼は差なり」のように、周代の儀礼制度は厳しい等級制度としても知られている。周の犠牲制度では、犬は士大夫クラスの用いるものと定められていたが、孫希旦のいうように、郷飲酒礼や郷射礼は士大夫の燕礼に相当する礼であった。このため、これらの礼に犬が用いられたことは身分相応だったのである。このように、古代中国の礼文化も深く犬肉の食用にかかわっていたのである。

次に陰陽五行思想も古代中国犬文化を促進した一つ大きな要素であった。陰陽五行学説は古代中国の人が自然界の変化を認識し、その規律を説明する方法論である。陰陽五行思想は古代中国の哲学であり、古代中国人の宇宙観でもある。数千年にわたり、中国社会の各方面を支配し、影響を及ぼしてきた。中国文化は陰陽五行思想ぬきでは語れない。

漢方医学は陰陽五行理論を根幹とした医学体系である。漢方医学の特徴は、自然との調和、人体内部の陰陽調和、治療より予防、薬より食物、一時的表面的な症状の緩和よりも長期にわたる体質の改善に重点を置くところにある。漢方医学は養生と治療を総合した医学体系である。このため、漢方医学において、日頃の食事生活および養生が特に強調され、自然界にある植物、動物などがすべてその性質（熱・温・寒・涼）によって陰と陽の二つのカテゴリーに分けられ、すべての動植物が漢方薬の原料となり、養生に利用できると見なされていたのである。

こうした医学思想はまた中国の飲食文化に大きな影響をあたえており、中国独自の食の思想を生み出したのである。陰陽五行思想を理論体系とした中国伝統の医学では、犬肉は養（養生）を意味する木行に配当され、陽を補い、気を益し、体を暖める、いわゆる養生、養老に適している肉と高く評価され、食用、養生、病気の治療など幅広く利用されていたのである。飲食と医学との関係について、「薬食如一」（すべての食べ物は薬用効果があり、薬となる）・「医食同源」などと表わされているように、昔から中国の人は食べ物を漢方薬と同一視しできた。すなわち食事療法をより重視したのである。養生に優れたとされる犬肉が古代中国で人気のある食肉の一つとなった背景には、陰陽五行理論を根幹とする伝統医学思想の支えがあったのはいうまでもない事実だろう。

最後に鬼神観と犬肉の食用については、古代中国で、死んだ祖先はその陽気が天に昇り、天神となり子孫に恩恵をもたらす、とされていた。このため、世の中で最も美味しい食べ物、いわゆる神饌を用意し、祖先を定期的に祭ることには、祖先に対する報いや感謝の意が込められていたのである。犬肉の羹は古代の宗廟祭祀に欠かせない神饌の一つであったため、毎回、それを用意し、供えなければならなかった。祖先を祭った後の犬肉などの祭肉は神の恵とみなされ、宗廟祭祀儀礼終了後に行なわれた餕礼の場で一族が分け合い食べることになっていた。こうした祖先崇拝を旨とした宗教儀礼が犬肉の食習慣を大いに促進したことはいうまでもない。古代中国の食用犬も、最初は祭祀の基準を満たすために行なわれた品種改良の過程で誕生したものであって、祭祀文化の産物といえる。

厄祓いでは主に犬の血、皮、そして頭の部分が使われていたが、残りの肉などが、神饌や食用に用いられたと思われる。そう考えられる理由は三つある。一つには、殷代のような墓に丸一匹の犬が埋められたケースを除けば、厄祓いに多用されたのは血や皮などであり、肉はほとんど使われていなかった。二つには、漢方医学では犬肉が養生に適し、犬は重要な漢方薬の原料として利用され、食習慣も一般的に行われていた。三つには、中国少数民族の場合、鬼やらい儀式が終了した後、村人全員がその肉を分けて食べたことが挙げられる。このように古代中国の犬肉食習慣はむしろ頻繁に行われていた祭祀文化によって促進されたことが多いと考えたほうが筋が通るのである。

上古時代にあのように栄えていた犬文化は南北朝時代（中古時代）に入ってからは、次第に衰え始めた。その原因は宗教、社会、経済など多方面にわたっている。まず食用の面では南北朝時代に入ってから、上古時代に牛、豚、羊など他の家畜と同様な感覚で食用にされてきた犬肉の食習慣が、次第に下火となり、当時の重要な料理書からほとんど姿を消した。そして少数の貴族や金持ちの食す高級料理から一般の民間人の食べる下級料理へと変わっていったのである。一方、この時期に社会生活における犬の役割の低下も顕著になった。上古時代からネズミ捕りの主役だった犬は、隋・唐時代以降における家猫の普及によって、その役割が終焉を迎え、犬によるネズミ捕りの歴史的な功績は完全に忘れ去られたのである。

何よりも衰退ぶりが顕著に表れたのは、祭祀における犬供犠の減少である。上古時代の如何なる祭祀の供犠にも欠かせなかった犬は、中古時代に入ってから、国家祭祀をはじめ各種の年中行事のなかで登場することが少なくなった。

その理由として、第一に挙げなければならないのは、いうまでもなく仏教・道教の影響と関与である。外来宗教の仏教が中国で勢力を伸ばしてきた時期はちょうどこの時期と重なっていた。仏教の因果報応、不殺生の思想は肉食が上等視された当時の人々の食生活に大きな影響を与え、精進料理が誕生したのもこの時期であった。一方、中国固有の土着宗教から発展してきた道教も仏教の主張に刺戟され、これまでの主張を一部転換し、牛や犬はとくに人類に貢献の大きい動物とみなされ、牛や犬の殺生禁断を打ち出したのである。仏教および道教のこうした影響のため、為政者たちも、次々と殺生禁断の日を設け、殺生禁断の令を繰り返してきたのである。一方、知識人のあいだでも肉食を控え、野菜類を中心とする、いわゆる中国式の菜食主義が台頭し始めたのである。

この時期においてもう一つ注目すべきことは、犬を蔑視する風潮が強くなった点である。当時、犬の愛護が訴えられる一方、社会生活における犬の役割が低下し、犬に対する親近感が薄れるとともに、食生活への宗教や行政の過度な介入に対する反発もあったのか、一部の人の間で、犬を穢れた物、賤しい物とする風潮が現れ、食用を嫌ったりする人が増えてきた。このように南北朝時代以降は、食用をはじめ、祭祀など様々な面において犬文化の衰退が起きていたのである。南北朝時代は中国犬文化の転換期であったといえる。

このように古代中国における犬肉の食習慣は歴史が長く、奥行きが深く、陰陽五行思想や忠君、敬老・養生および等級制度といった中国独特の礼文化に根ざしたものであり、正に一種の食文化、食の思想といえる。決して貧窮によってしかたなく犬を食べたわけではなかった。

論文審査の結果の要旨

本論は古代中国の犬食文化について考究したユニークな論考である。犬食文化は現代の中国では研究対象としては低レベルのものとして無視されるか敬遠され、さらに西欧的な観点のみから見た、偏見に満ちた動物愛護思想が加わったこともあり、これを歴史上に実在した生きた文化として考察することはほとんどなかったといっていい。桂氏はこのような状況を乗り越え、古代中国の歴史上の事実として犬食文化を確固たる伝統文化として位置付けた上で、これに真正面から取り組んでいる。テーマの選択自体が独自の発想といっていいだろう。

氏は、研究対象を上古時代（特に周代から秦漢時代まで）の中国の犬食文化に絞っている。それは、この時代の犬食がいかなる偏見ももたれずに、牛肉、羊肉、豚内、鶏肉などと同様に、通常の食肉として扱われており、時には豚や鶏の肉より高級な食肉として遇されていたからである。そして、犬肉の高級食肉としての地位は、上古時代の中国の思想や文化を支えた「礼」、「陰陽五行」そして「鬼神信仰」の三つを基盤として成立していたことを詳細に論じている。「礼」は、犬食の社会的な地位を規定し、「陰陽五行」思想は、犬肉のもつ医学的、栄養学的な効能を保証し、さらに、「鬼神信仰」は駆鬼除災などの祭祀儀礼の点から犬食の文化的な広がりを支えたと考察している。

これら三つの要素に支えられた犬食文化のありかたは、決して今日に見られるような低俗なものではなく、また忌み嫌われるものでもなかった。例えば、犬の肉を儀礼や祭礼に使うことができるのは、大夫以上の上流階級だけであり、季節によっては王も積極的に食すべき食材であるとされていたのである。また、「陰陽五行」思想の観点からみた、犬肉のもつ「陽」のエネルギーは、王たちの墓所を浄化し、生者や死者を悪霊から護る事が可能なものとして捉えられていた。そして、犬肉のもつとされた保温効果は、老人のように体力が衰えてきた人々の健康を保持するのに役立ち、一種の養生法としての価値があると考えられていたという。

無論、不満な点がないわけではない。犬肉を儀礼や養生法として大量に消費するためには、その経済的な背景と社会制度上の体制が必要になるし、この点からの記述が比較的手薄になっていることはある。また、南北朝時代以降の犬食文化の衰退を、仏教や道教などの宗教的な要因のみから説明している点は、十分なものとはいえない側面もある。ただ、これらの諸点も、氏の独創性にあふれた、スケールの大きな古代中国の犬食文化研究の価値を損なうものではないことはいうまでもない。

本論文は、従来の中国食文化研究の水準を越える優れたものであり、博士（言語文化学）の学位請求論文として十分に価値あるものと認められる。